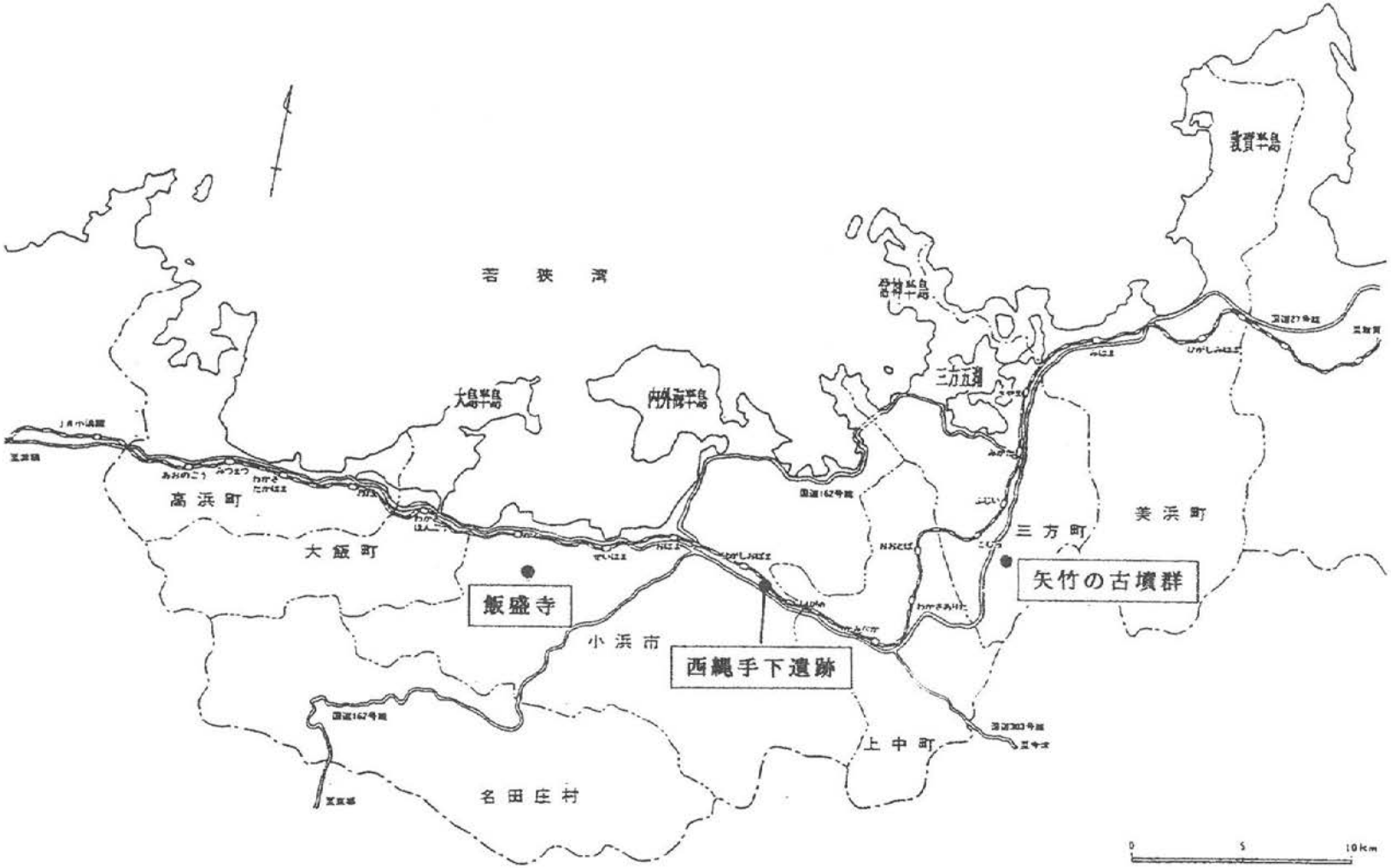
平成８年度郷土史講座資料

平成８年度

若狭地方における発掘調査の成果

平成９年３月16日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館


若狭湾
大島半島
内外海半島
登地半島
宮崎半島
敦賀半島
三方五湖
高浜町
大飯町
美浜町
三方町
小浜市
上中町
名田庄村
飯盛寺
西縄手下遺跡
矢竹の古墳群
0
5
10km

遺　跡　位　置　図

遺　跡　名	矢竹古墳群（南古墳）
所　在　地	三方町能登野６１－２６
調査　原因	県営ふるさと農道緊急整備事業
調査　期間	平成７年１２月１日～平成８年３月３１日
調査　主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　　田辺 常博・青池 晴彦
調査　面積	１，６００㎡
時　　代	６世紀末～７世紀初頭

南古墳の状況は、古墳本来の封土のほとんどが後世の耕作や昭和４７年度施工の土地改良により削りとられていましたが、埋葬施設の横穴式石室の石材は大型であったためか除去されずに残っていました。しかし、天井石や側壁の上部に使用された石材は移動しており、調査前に墳丘表面に露出していた大型の石材などがそれにあたると考えらました。

後世に積み上げられた小礫や土を取り除いて、残存する石室の配石を確認し、さらに天井石などの大型石材を除去して石室内に入りこんだ土を掘り下げた結果、南西方向に開口する両袖式の横穴式石室が検出されました。石室の規模は、羨道部で羨門幅1.7ｍ、玄門幅1.05ｍ、羨道長4.2ｍ、玄室部は奥壁の石材を一部欠損していますが、奥壁幅1.75ｍ、袖部幅1.7ｍ、玄室長4.9ｍを計測し、石室の総延長は9.1ｍが現存しています。玄室の高さは、残りの良い東側壁で約1.8ｍを計測します。また、床面（第１次床面？）には全体にわたって20～50㎝大の自然石が規則的に石畳のように丁寧に敷かれていました。

周堀の調査は、土地改良による影響が比較的少ないと考えられた墳丘西側と南側を中心に行いました。最初に幅１ｍ、長さ11～16ｍにわたるトレンチを３ヵ所設定し、さらに広範囲に耕土を除去し周堀の調査を試みましたが、それらしき遺構は検出されませんでした。あるいは、土地改良によって周堀の痕跡をとどめていた耕土面が削られてしまったためと思われます。したがって本来の古墳全体規模については明かではありません。

副葬品としては、玄室及び羨道の床面から土器類の須恵器杯、無蓋高杯、短頸壺、提瓶、甕、土師器の細片、武具類の鉄鏃、装身具の耳環などが出土しています（図３）。土器類については破砕した状態で出土しているものが多いのですが、玄室の側壁沿いに検出したものは比較的残りがよく、ほぼ完形に近いものや一括で取り上げられるものもあることから、追葬が行われ、その際壁ぎわにうつされたものとの見方ができます。

南古墳の築造時期は、第１次床面での出土遺物や石室の状況から６世紀末～７世紀初頭頃と考えられます。

また、石室の利用は古墳時代以降の古代にも行われているとみられ、第１次床面より上層の玄室内封土から、10世紀代の平安時代に想定される須恵器の壺、盤及び吉見浜式製塩土器などの土器類と鉄製品の鉄鎌がほぼ同一の面で出土しています。このことから、古代における古墳の石室の再利用の一端を知ることができます。

石室内出土の主な副葬遺物

【第１次床面】

土器類：須恵器

杯身 ５点　杯蓋 ５点　宝珠つまみ付杯蓋 １点　無蓋高杯 ３点

短頸壺 ２点　甕 ２点　提瓶 １点

武具類：鉄鏃 １２点

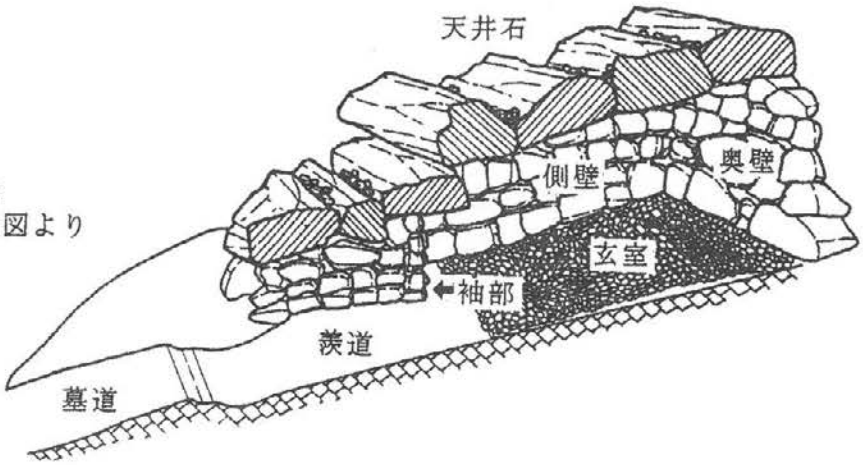
装身具：耳環 ２点

【第２次床面】

土器類：須恵器壺 １点　須恵器盤 １点　土師器鍋 １点

製塩土器（吉見浜式）１点

農具類：鉄鎌 １点



高浜町行峠古墳
横穴式石室模式図より

遺　跡　名	矢竹古墳群（北古墳）
所　在　地	三方町能登野６１－２５
調査　原因	県営ふるさと農道緊急整備事業
調査　期間	平成８年４月２日～平成８年１１月６日
調査　主体	三方町教育委員会
調査担当者	三方町立郷土資料館　　田辺 常博・青池 晴彦
調査　面積	２００㎡
時　　代	６世紀末～７世紀初頭

北古墳の状況は、南古墳と同様に古墳の周囲の封土が耕作や土地改良により削りとられていました。また後世に積み上げられた小礫が墳丘全体を覆い、埋葬施設の石材などの露出もみられず、古墳かどうかも疑わしいような状態でした。

しかし小礫や土を取り除いてみると、天井石や側壁の石材が現われ、南古墳よりは少し規模が小さいものの、片袖式の横穴式石室が検出しました(図５)。石室の規模は、羨道部で羨門幅1.4ｍ、玄門幅1.05ｍ、羨道長2.65ｍ、玄室部で奥壁幅1.2ｍ、袖部幅1.2ｍ、玄室長3.75ｍを計測します。石室の総延長は6.4ｍが現存しています。玄室の高さは、残りの良い東側壁で約1.5ｍを計測します。玄室床面には全体にわたって10～15㎝大の自然石が地山の上に敷かれていましたが、特に規則性のようなものは認められませんでした。また石室の開口方向が、ほぼ正確に南古墳の石室と同じ方向に開いており、二つの古墳の関連性が指摘されます。

副葬品については、玄室及び羨道の床面などから土器類の須恵器杯、無蓋高杯、提瓶、武具類の鉄鏃、鉄刀などが出土しています(図４)。北古墳の遺物は、土器類についてはほとんどが完形に近い状態で出土していますが、数は６～７点と南古墳に比べてかなり少量です。

北古墳の築造時期は、今のところ出土遺物や石室の状況からみて、南古墳と同じく６世紀末～７世紀初頭頃と考えられます。

石室内出土の主な副葬遺物

【第１次床面】

土器類：須恵器

杯身　１点　　無蓋高杯　１点　　提瓶　３点　　長頸壺(?)　１点

武具類：鉄刀　１点　　鉄鏃　１２点

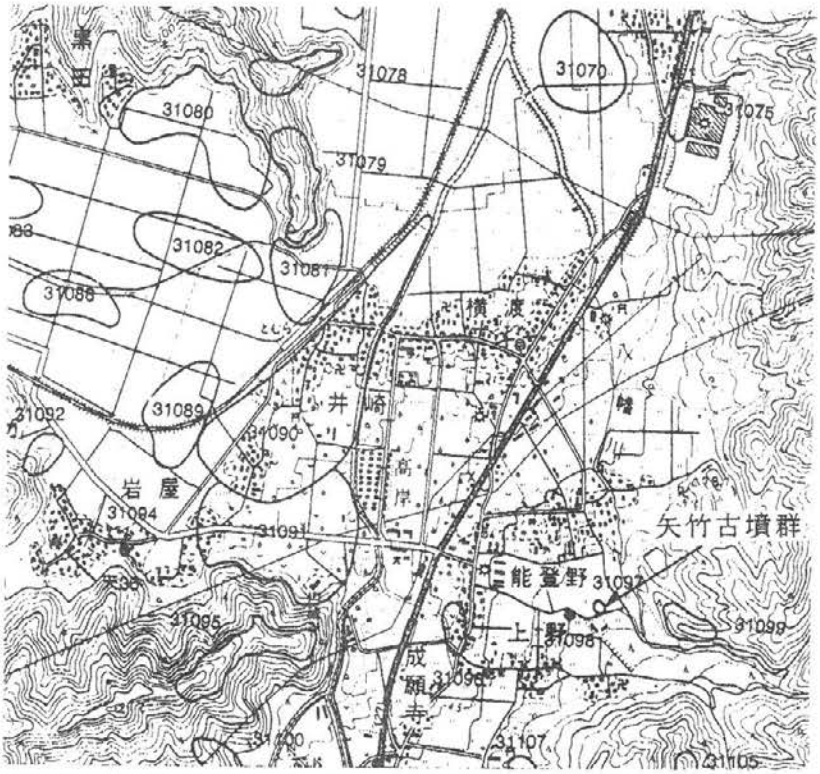


図１　矢竹古墳群位置図

番号	遺　　跡　　名
31070	的場遺跡
31075	きよしの古墳
31078	西の坪古墳群
31079	井崎砦
31080	八反田遺跡
31081	井崎丸山遺跡
31082	江端遺跡
31083	下の坪遺跡
31088	向黒遺跡
31089	年清水遺跡
31090	千本木遺跡
31091	植木遺跡
31092	双子山古墳群
31094	ダイショウゴウサン古墳
31095	岩屋堡
31096	畑上遺跡
31097	矢竹古墳群
31098	大塚古墳
31099	能登野城
31100	白屋北山古墳群
31105	成願寺砦
31107	闇見神社古墳群

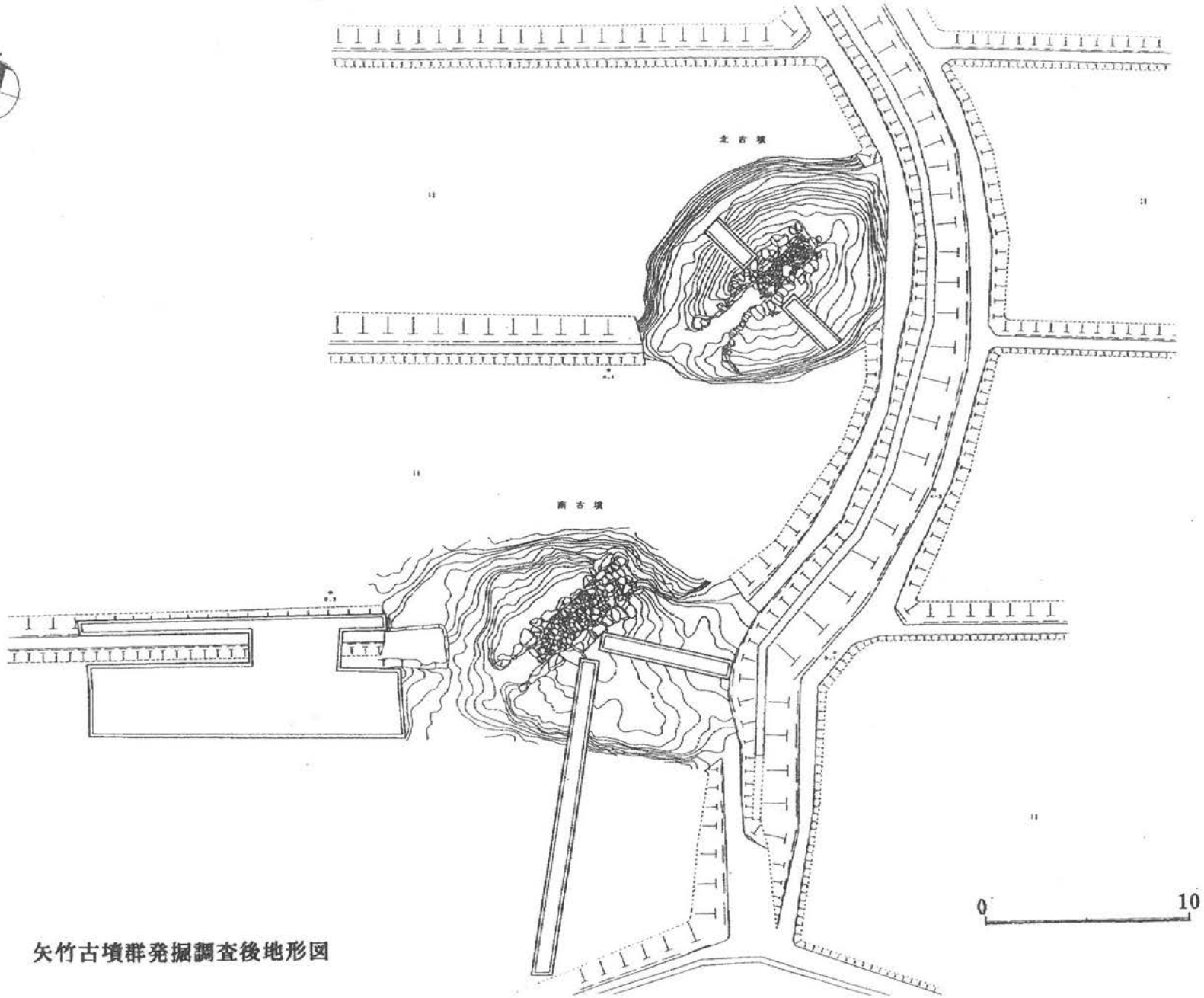


図２　　矢竹古墳群発掘調査後地形図

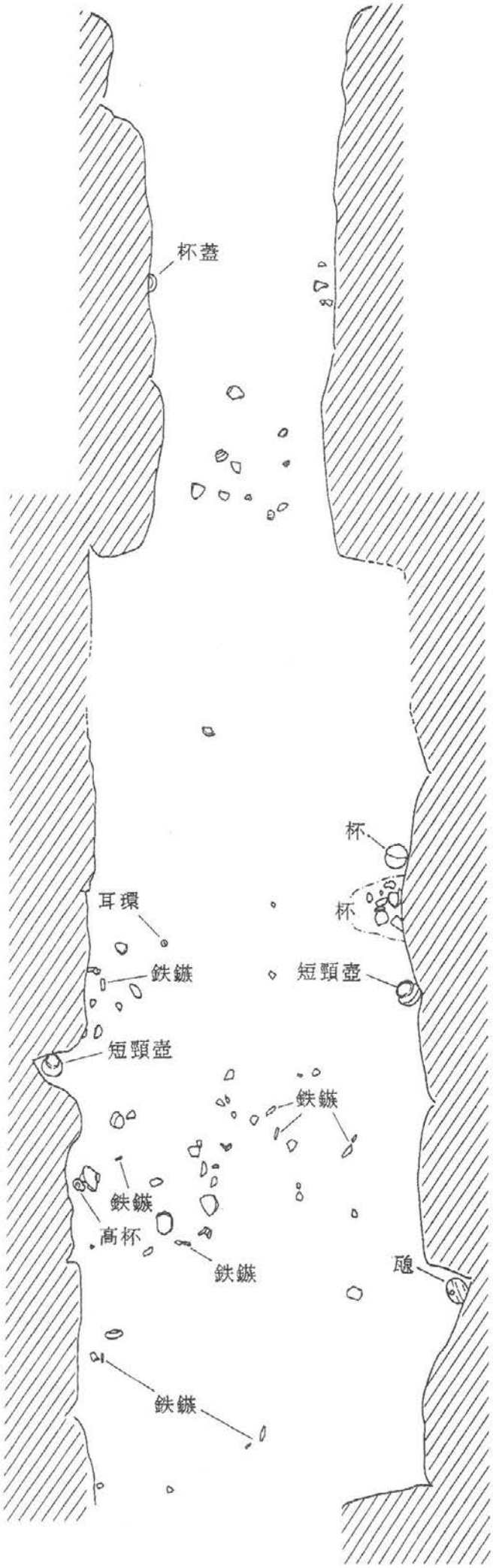


図３　南古墳　遺物出土状況（第１次床面）

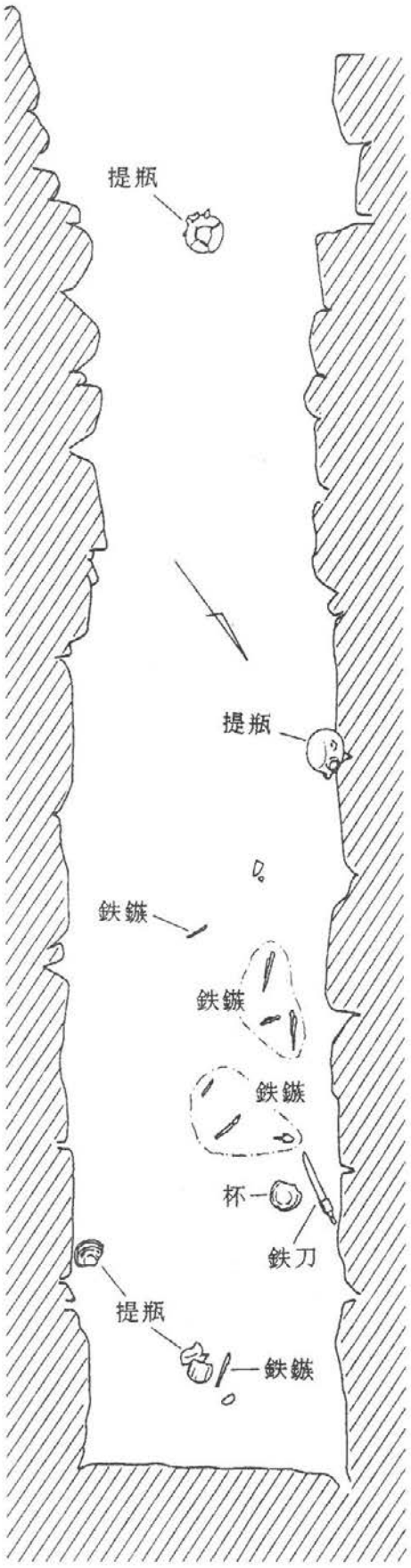
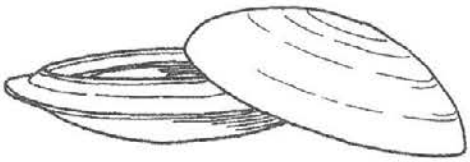


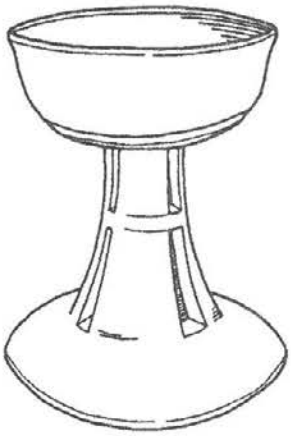
図４　北古墳　遺物出土状況

〈主な出土遺物〉



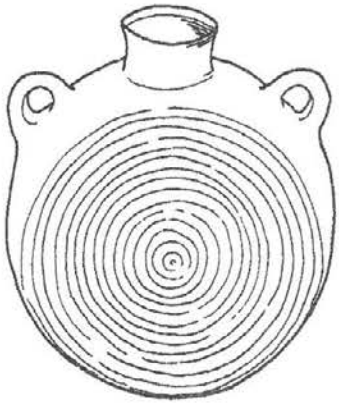
杯身・杯蓋（つきみ・つきぶた）

鼓（はそう）

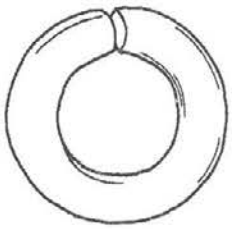


高杯（たかつき）

短頸壺（たんけいこ）

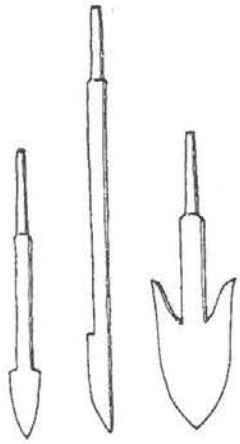


提瓶（ていへい）



耳環（じかん）

鉄刀（てっとう）



鉄鏃（てつぞく）

この挿図は高浜町行峠古墳発掘調査現地説明会資料をもとに作成しました。

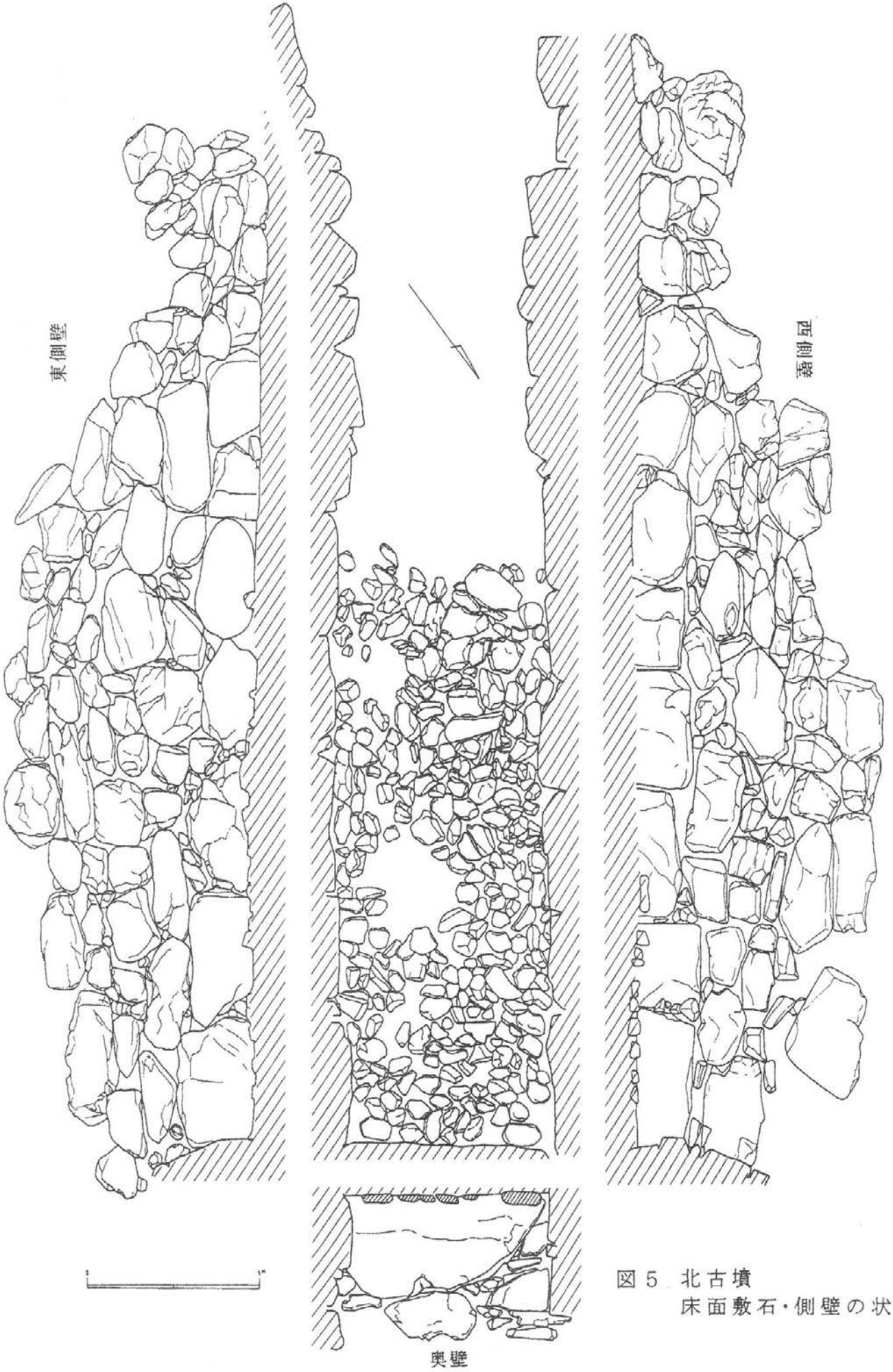


図５ 北古墳
床面敷石・側壁の状況

西縄手下遺跡

所 在 地　福井県小浜市太興寺第10号8番地
調査原因　松永地区農業集落排水緊急整備事業
調査主体　小浜市教育委員会
調査担当者　下仲隆浩、松川雅弘
調査期間　平成7年8月28日～平成8年11月12日
時　　代　古墳時代後期初頭(下面)、奈良・平安時代(上面)

《遺跡の環境》

この遺跡は小浜平野を西流する北川の支流、松永川が形成したゆるい扇状地の先端に立地する。すぐ南には丹後街道が東西に走り、近隣には古代寺院の太興寺廃寺、国分寺跡が存在する。また、松永川の東を西に向かって延びる尾根上には、天神山古墳群が、そしてその尾根先にある平野部には太興寺古墳群が存在する。当該遺跡は縄文・平安時代の遺物散布地とされていたが、平成６年度の試掘調査によって、古墳時代後期初頭と奈良・平安時代(律令期)の複合遺跡であることが確認されている。

07146 新保田遺跡　07147 西縄手下遺跡　07148 太興寺遺跡　07149 太興寺廃寺跡　07150 太興寺古墳群　07152 天神山古墳群　07153 まがりと古墳群　07154 四分一山上古墳群　07155 上野八幡古墳　07157 平野古墳群　07159 白鬚神社古墳

図１　松永地区の主な遺跡

《調査の概要》

上面遺構及び遺物

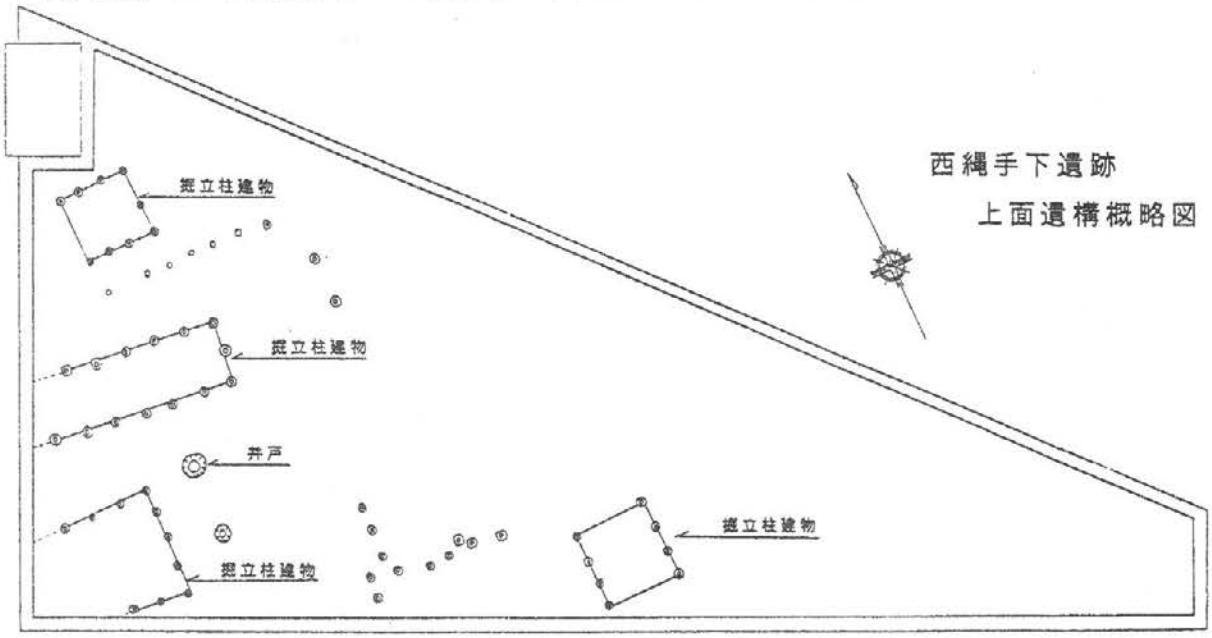
〔遺　構〕　遺構は掘立柱建物跡が４棟、ピットが数十個所と、土器溜・井戸跡が各１個所確認されている。建物は西地区で２間×３間、２間×６間以上、４間×３間以上が各１棟ずつ、東地区では１間(間に束が存在する可能性あり)×３間のそれが、１棟確認されている。東地区の建物は南北方向に、西地区のそれらは東西方向に棟を合わせて建てられている。

土器溜りはくぼみ程度の浅いもので、ここからは須恵器と土師器が混在して検出されている。須恵器の器種としては杯身が最も多く、ついで杯蓋そして皿である。土師器の器種については、皿と小型の壺が確認されている。その検出状況としては垂直に立っているものもあり、様々であるが、多くは平面的に確認されている。

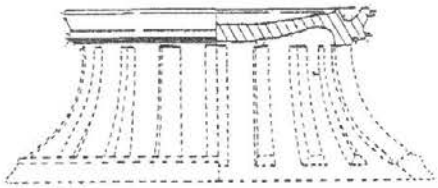
井戸跡は直径2m強で、深さは1.6mを計る。しかし、井戸枠の部材はすべて持ち去られており、井戸の形態等は復元できない。

〔遺　物〕 遺物は土器と柱根である。土器は大多数が須恵器の杯身と杯蓋、そして甕の破片である。時期は混交しており現段階での特定はできないが、奈良～平安時代の土器が大部分を占めている。その中で特徴的なのは、緑釉陶器の検出量と、硯の存在である。緑釉陶器に関しては軟質系と、硬質系の両方が検出されている。また、今回の確認点数だけで、今までの小浜で確認されているいるそれらの数を上回ると思われる。硯に関しては２面確認されている。１面は円面硯で、もう１面は風字硯である。双方とも破片であるが、使用痕が確認できる。円面硯は脚の透しが２０個である。風字硯には中央に縦方向の稜を設けている。

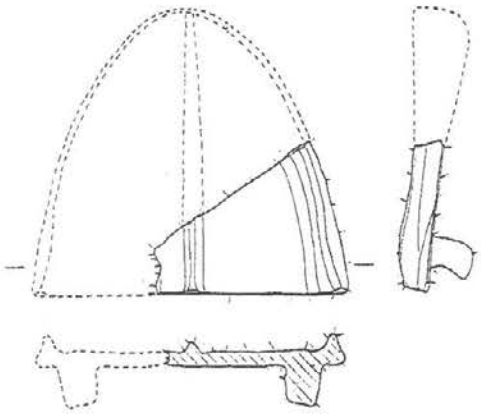
柱根は４本確認されており、２本が直径30cm、あとの２本の直径は40cmと20cmを計る。直径40cmの柱根がもっとも大きく、長さ50cmについて遺存している。



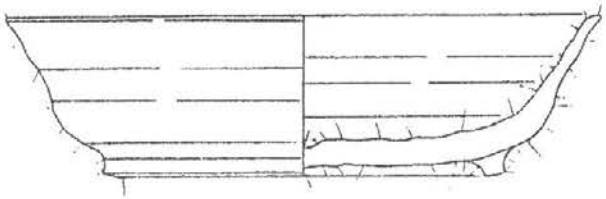
西縄手下遺跡
上面遺構概略図



円面硯

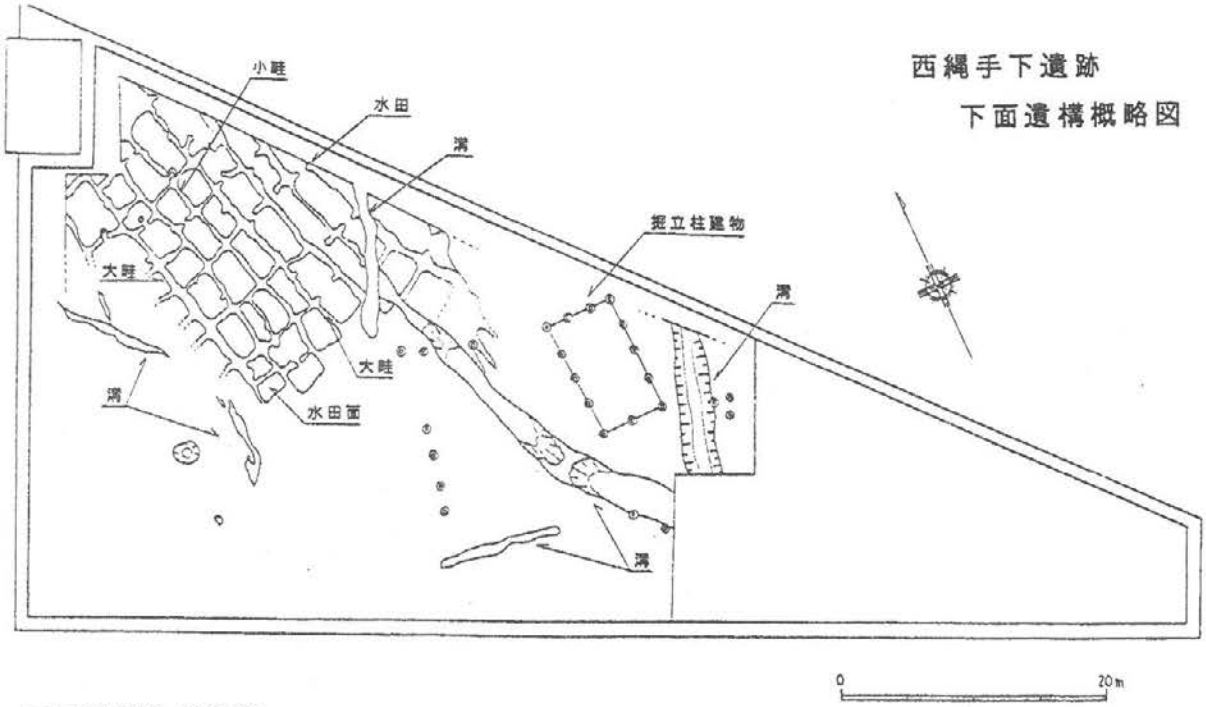


風字硯



杯　身

※ 杯身は他の遺物の１／２の縮尺



西縄手下遺跡
下面遺構概略図

下面遺構及び遺物

〔遺　構〕 掘立柱建物遺構が１棟、ピットが十数ヶ所、水田跡が４２面(小区画数)、そして溝が５本確認されている。

建物は調査区の東地区で確認されており、その規模は３間×４間である。この建物は南北の方位に棟を合わせて建てられている。柱についてはすべて抜き取られているが、痕跡からの直径は20～25cmと推定される。掘方については、直径60～70cmの規模を有する。また、掘方のいくつかには柱の痕跡が２ヶ所確認できるのもあり、柱の立て替えがあったことが確認できる。

水田跡は４２面(小区画数)確認されている。すべてが洪水時の砂礫によって覆われている。遺構は非常に遺りがわるく、畦と水田面はわずかな起伏でしか確認できない。水田(小区画)は長方形を基本としており、北北西方向に長軸を合わせて造られている。この方向は、松永谷の開口部から北川へ向けて、松永川が北流していたことによると思われる。水田は松永川が形成した緩やかな扇状地上に営まれており、その傾斜を利用して配水し、耕作を行っている。そのため前述したように北北西方向に長軸を持つ、長方形の水田が配置されるわけである。

構造としては幅50cm前後の大畦を等高線と直交させ、約6mの間隔で並行に造っている。そして、その間に幅30～40cm小畦を２本走らせ東西方向に三分割している。これに交差させるように、小畦と同規模の畦を3～4m間隔で配置し、小区画の水田を造っている。また南北方向の畦が屈折したり、突起を持ったりしているが、これは東西方向の畦を付け変えた痕跡と思われる。

運営については次のようなことが言える。小畦には部分的に開口部が造られており、小区画間の水利をになっている。しかし、大畦についてはそのような構造が見られない。このことは大畦に区切られた域内を一つの単位として、水利を基軸とした耕作が営まれたことを示唆している。

溝は６本確認されている。その中で調査区中央から北流する溝は、検出された土器からこの遺構面よりも新しいものであることが確認されている。この遺構面に伴う溝は残りの５本である。調査区西地区に見える２本の溝は、本来１本のものである。これはその高低差から北流していることが、また南地区で確認されている浅い溝については西流していることが確認されている。この３本については、敷設された位置及び水流の方向から、水田に水を供給させるためのものであると考えられる。

大溝は２本確認されている。１本は調査区東端を北北東に流れ、もう１本は調査区南東から北北西に流れている。双方とも洪水等により、その幅が拡大している。特に後者については、その流路が水田域を貫通していること、溝の底部が隆起と落ち込みを繰り返し一定していないこと、法面等に人為的な痕跡が僅かしか見られないことから、用水用の溝が洪水の水流によって拡大されたものと思われる。

〔遺　物〕 遺物は土器と柱根である。土器は須恵器と土師器が確認されている。

須恵器は杯身とハソウが確認されている。杯身の胎土は緻密であるが、若干の花崗岩砂粒を含んでいる。ほとんどの焼成は固いが、１個体だけ生焼けのものがある。口縁部はやや内傾して立上り、端部内面に明確な段を持つ。また、底部外面に回転ヘラ削りを２／３ほど施している。ハソウは頸部以上が欠けている。胎土は緻密で焼成は非常に固い。胴部には回転カキ目を施し、さらに胴部最大径部には波状文を施している。欠失部の断面は非常に薄く、その技術の高さがうかがえる。

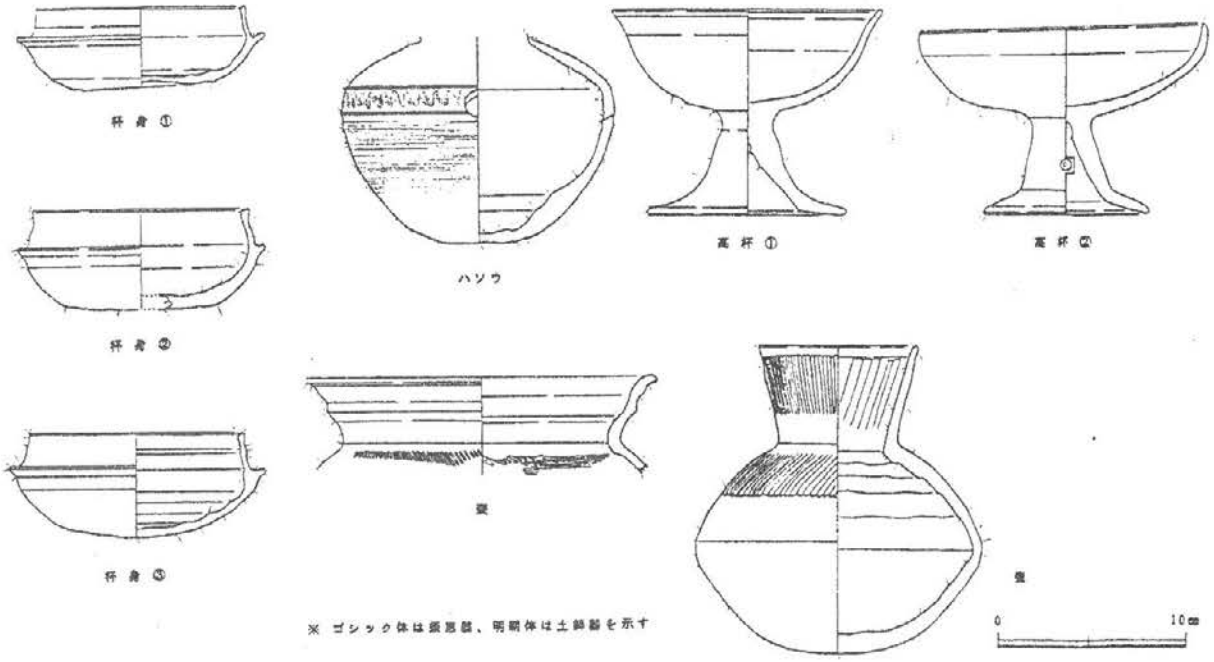
土師器は甕、高杯と壺が確認されている。甕は口縁部のみが確認されている。胎土は不良で、須恵器よりさらに粗い砂を多量に含んでいる。焼成は良好である。調整は体部内外面ともに叩きが見られ、口縁部については内外面ともに横ナデが見られる。高杯は６個体確認されている。このうち２個体を掲載する。これらは同一ピットで確認されたものであるが器形は異なる。①は杯部が深く口縁端部で外反するが、②は杯部が浅く口縁端部も直口気味である。脚部についても①は一度くびれて開き脚端部は平面的に接地するが、②は杯部底からそのまま開き脚端部が点でしか接地しない。壺については、胎土も焼成も良好である。体部は算盤珠状の胴張りを示している。口縁部は垂直気味に立上り、端部は少し外反している。調整は口縁部内外面に、縦方向のヘラミガキを施している。また体部の肩には、右上がりの斜め方向にヘラミガキを施している。

柱根は６本確認されており、３本が直径30㎝、あとの３本の直径は20㎝強を計る。しかしながら、残念なことに今回確認された掘建柱建物とは、どれも関係していない。

《まとめ》

上面遺構は、掘立柱建物の規格性、緑釉陶器の検出量、円面硯と風字硯の存在から、律令期において政治的に重要な機能を持った建物群の存在が推定できる。この遺跡の西には国衙(現在の県庁のようなもの)があったと推定される遠敷地区があり、上面遺構はそれに関連したものであると考えられる。

下面遺構については、古墳時代後期の初頭(６世紀の初頭)に松永谷の開口部に建設された、集落の一部であると推定できる。この時代は連係を持った王たちが、日本各地を支配し、さらに支配の象徴として巨大古墳が全国各地に築造される時代でもあった。若狭では上中町の日笠に上船塚古墳が築造される直前であり、これらの掘建柱建物遺構や水田遺構も、それら巨大古墳を築造する体制の一部であったと考えられる。



飯　盛　寺

所　在　地	小浜市飯盛１４５－１
調査原因	重要文化財飯盛寺本堂の解体修理
調査期間	平成７年１２月５日～平成８年５月３１日
調査主体	高野山真言宗　飯盛寺
調査担当者	松川雅弘・下仲隆浩
時　　代	中世（１５世紀末）

《調査の概要》

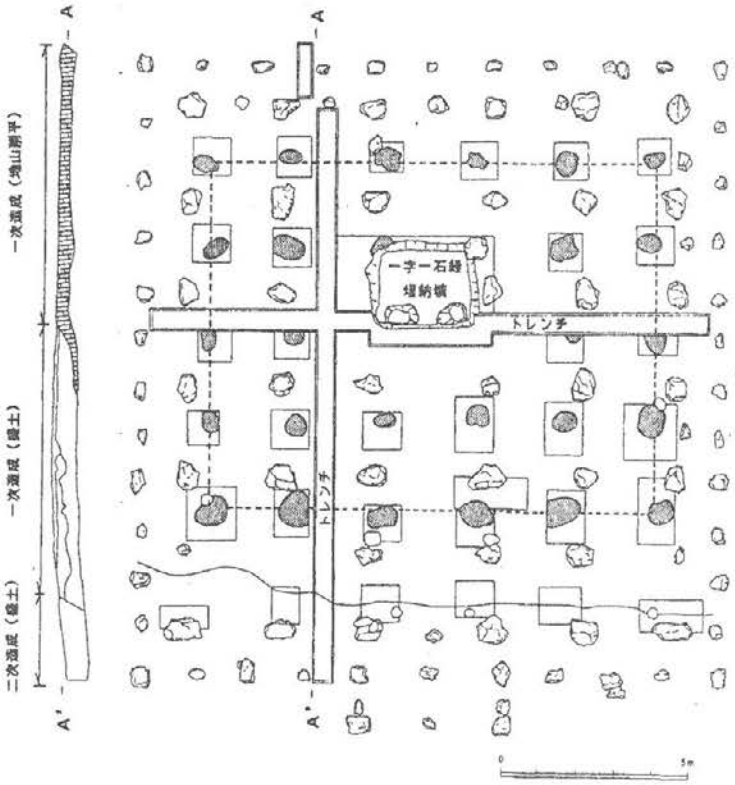
小浜市加斗地区の飯盛山中腹に立地する深山飯盛寺は、飯盛寺文書によると文和年中(1352~1356)に僧覺能によって開山されている。重要文化財に指定されている五間四面の現本堂は、文明16年(1484)の山火事により伽藍が炎上した後に再建されたもので、本堂組物の墨書から延徳元年(1489)の建立とされている。この本堂は、造営年次において市内の羽賀寺本堂と神宮寺本堂をつなぐ時期のもので、中世密教寺院建築としてその価値は高い。

今回は平成６年度から行われている本堂解体修理に伴い、基壇の規模の確認、そして本来の屋根の姿を言及するための雨落ちの確認調査が実施された。第１段階として、前記の確認のために桁行方向に14.8m、梁間方向に17.0mで幅50cmのトレンチを十字に設定して調査を行った。第２段階として、トレンチ調査により確認された遺構の調査、及び使途不明礎石と、それに伴うと考えられる礎石抜き取り穴に関連する建物跡の調査を実施した。

《調査の結果》

【基壇の構造】　トレンチ調査の結果、雨落ちの確認は出来なかったものの、基壇が２期にわたって造成されていることが明らかとなった。第１期の造成は山の斜面を削って平場を造り、さらにその削平土で谷の部分を盛土して基壇を造っている。第２期の造成は、盛土によって基壇前方の拡大を行っているが、第１期に比べ叩き締めが悪く、長年の風雨によって基壇上部が流れてしまっている。

【前本堂の規模】　現本堂の礎石配列に合わない礎石と、それに伴うと考えられる礎石抜き取り穴が１ヶ所確認されたため、この柱間をもとに基壇全域に調査を拡大したところ、桁行５間、梁間４間の前本堂跡が確認された。この本堂跡は、現存本堂より小規模であり、第１期造成

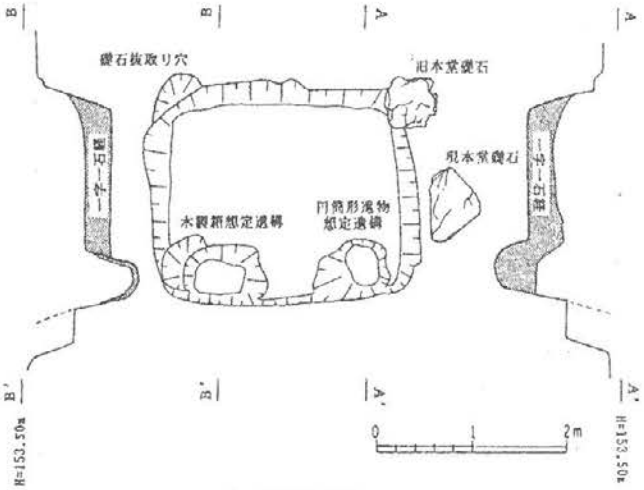


基壇遺構実測図

礎石抜き取り穴

の基壇内に収まる。しかしながら、礎石抜き取り穴の規模から推定すると現本堂と遜色のない礎石が用いられていたようである。実際、現本堂に転用された礎石も数基あり、その表面には強い加熱を受けた痕跡を残す。また礎石抜き取り穴を観察すると、礎石下に粘質土を敷くなど現本堂礎石にはない丁寧な作業も見受けられる。

【経石埋納壙】　現本堂須弥壇地下に一字一石経の埋納が確認された。埋納壙平面の形状は隅丸長方形で、規模が桁行方向に2.8m、梁間方向に2.1m、底面までの深さ0.8mを測る。経石は埋納壙底面から平均30cmの厚さで埋納されており、上部は多量の炭化物や焼土塊を含む土で覆われている。さらに経石と一緒に木箱のようなものと円筒形のようなものが埋納されていたことが確認されたが、共に残存する明確な遺物はなく後者に関しては盗掘を受けている。

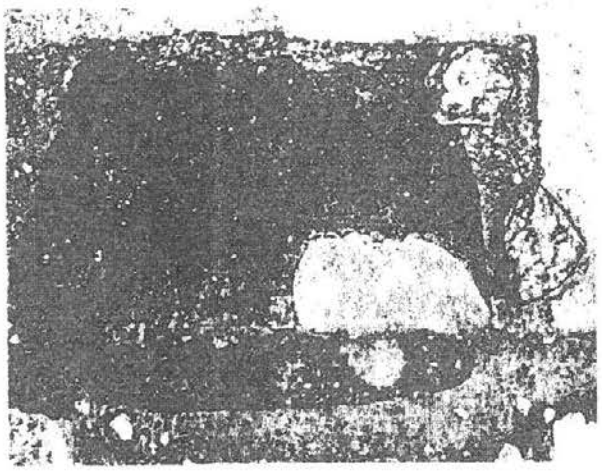


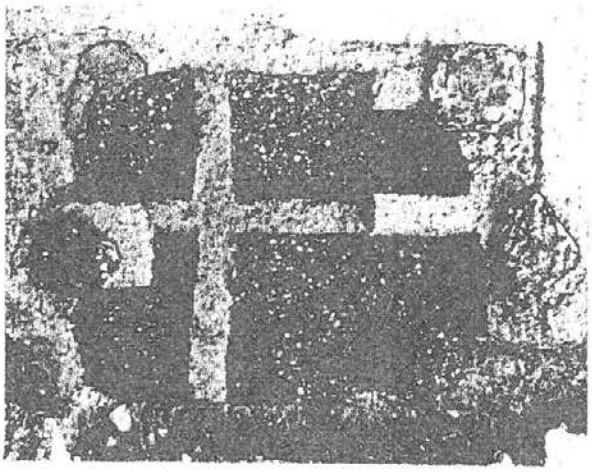
一字一石経埋納壙実測図

【一字一石経】　石材は扁平な河原石を用い、墨書により一石に一字写経されている。希に４文字の熟語や固有名詞が書かれているものもある（このような形態のものも片面には一字の経文書写がある）。経石総数は73,036個、石材の大きさは平均で長径5cm前後、短径3cm前後で、複数字で表裏書写の経石は総じてやや大型のものを用いている。書体については少なくとも3人以上の筆跡が確認されており、集団による一字一石経の書写が行われたと考えられる。

一字一石経個体数（個）

解　読	34，507
解読不可	25，293
書写なし	13，236
合　計	73，036


一字一石経埋納状況


一字一石経検出状況

《ま と め》

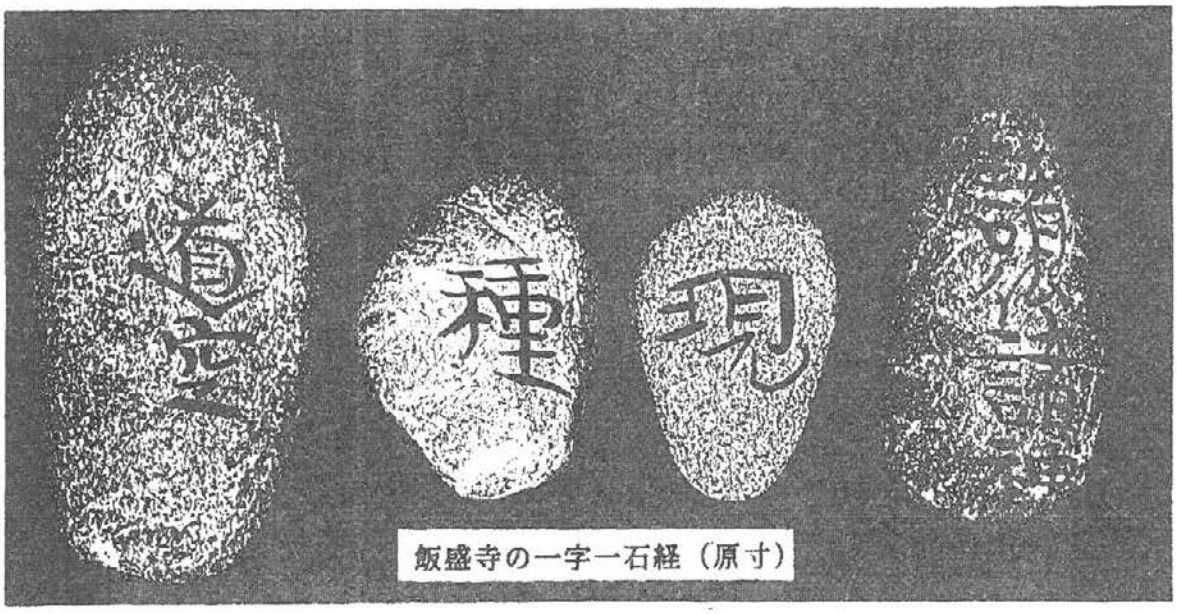
焼失以前の飯盛寺には、地山を削りだして造成した基壇の上に、現本堂より小規模な桁行５間、梁間４間の本堂が建っていたと考えられる。文明16年（1484）の本堂焼失後、基壇の再造成、拡大が行われるのであるが、確認された礎石抜き取り穴に多くの炭化物と焼土塊を含むことから、この工事は焼失後短期間のうちに行われたと考えられる。また、一字一石経の埋土にも同様の炭化物と焼土を含むことが確認されている。そして、この埋納壙は前本堂の礎石抜き取り穴を切る形で存在し、さらに現本堂礎石の下に位置している。これらのことから、一字一石経の埋納は前本堂焼失の後に、基壇造成工事とともに行われたと推察される。

よって一字一石経の埋納については、現本堂建立に伴う祈願或いは地鎮行為の意味合いが強いと考えられる。また、２５３個体確認された複数文字書写の経石には、弘法大師、覺能などの特別なものを除いても１０人以上の固有名詞らしきものがあり、亡世父母、六親眷属などの書写も見られる。これは、如法経による追善供養や自身の逆修供養に伴うものと考えられ、堂宇建立時埋納による作善功徳の意識があると思われる。

一字一石経の埋納は、通常は経塚という形態をとり、寺院基壇からの確認は極めて珍しく、発掘調査例としては日本最古のものである。このような重要な遺構が重要文化財基壇内から確認されたことで、これからの重要文化財の解体修理における基壇の取扱いに一石を投じたといえる。

２文字以上書写の経石
（確認２５３個体中代表的なもの抜粋）

表文字	裏文字	石 数
龍 天	妙・如	１８
道 空	華・蓮など	１４
自 牧	経・音など	８
覺 能	妙	３
弘法大師	妙・為など	１２
夢窓国師	妙	１
諸天三宝	妙・如など	１８
諸仏諸神	法・沙など	１５
三界万靈	蓮・経など	１３
法界衆生	千・巻など	９



飯盛寺の一字一石経（原寸）

＊　一字一石経は、寺院の建立祈願のために境内地に「経塚」を造り埋納している事例が多く確認されている。しかし、多数作善の意識に依り各村落単位で埋納されたものや、墳墓等に関連して個人により追善供養のため埋納されたものもある。平安時代中期に始まる末法思想による経典を入れた経筒埋納の経塚に比すると、より庶民的で身近な経塚といえる。埋納は中世に始まり、江戸時代には最盛期を迎える。河原石に墨で一文字づつ写経されているものが約5～6万個、多いもので約8万個埋納されている。法華経の経典を写経した事例が最も多い。